HARD COPY
学長選考に私たちの想いを反映させよう！
ひろば
号外
'05.3.2
その2
発行　広島大学教職員組合
〒739-0046　東広島市鏡山 1-7-2 広島大学内
TEL 082-422-7556　（内線・東広島 5390）
http://home.hiroshima-u.ac.jp/union/
mail : nagatani@hiroshima-u.ac.jp（ひろば担当）

「学長候補者に抱負を問うアンケート」に関連して、岸田裕之候補が意向投票管理委員会に提出した「学長就任に対する抱負」を掲載いたします。先般お届けしたアンケート回答冊子に補充を願います。

意向投票対象者　岸　田　裕　之

広島大学の発展と“舵取”の哲学
—継承と新たな創造による再構築—

全く思いも寄らず意向投票対象者に選ばれた。もとより学長としての器量を持ち合わせていないことは心得ているが、この事態を厳粛に受けとめ、「抱負」を述べることとしたい。

国立大学法人化し、従来とは異なって、中期目標・中期計画のもとで年度計画を立て、それを評価するという形で運営が行われていることは、あらためて指摘するまでもないことである。中期計画にはほとんどの事柄が網羅された状態であり、学長をはじめ構成員にはそれらの達成を容易にし、法人広島大学の発展の基盤を確立することが求められている。

また、法人化してこの１年の間に管理運営の基本的柱である予算の編成、人員配分について法人本部と部局の間で数々のやりとりが行われ、いわゆる資源配分の有様についても基準がほぼ定まった状態にある。

この１年間の現状を踏まえると、法人広島大学の“かたち”にとって重要な残る課題は、管理運営体制の整備・充実であり、それを進める姿勢であると私は考えている。

一、学長は機関の長である。その賦与された権限とそれにともなう責任の重大さを認識し、制度にのっとって健全かつ合理的な運営に心がけ、適宜総合的な判断を下しながら、それに基づいて学内また学外に明確に発信をして広島大学の存在感を示していきたい。

二、大学が教育研究現場であることを踏まえ、部局の固有性を尊重し、その体力を高める視点と工夫が重要であると考える。運営上においては、可能な限り部局の自律的教育研究体制を支援し、集権と分権を的確に組み合せて機能させるようつとめたい。

三、広島大学は伝統もあり、実績もあり、その規模においても、日本でトップクラスの大学である。この巨大な国立大学法人広島大学を運営することは至難のわざである。

当面の最大の課題は、法人化後の本部組織の点検である。各室の人員と職務量の関係、職務内容の取捨、民間に任せた方が効率的なものがあるかどうか、また縦割行政という言葉があるが、各室間、室等を越えた階層間、各理事間の緊密かつ創造的連携のもとに全学的課題が適正かつ迅速に調整されているか等々、検証することである。

具体的には理事・副学長を減らし、合議、そして意思決定の機能向上をはかりたい。

四、広島大学は国内・国外からの多くの学生が学ぶ、将来の社会、国家、世界を担う人材育成・人間形成の場である。広島大学は教育面において大きな伝統と実績を持つ。それを活用して誇りと自信を持った学生を送り出したい。そのためには、教職員が学生と向き合って学び、思考力・判断力・表現力等々の資質を双方向的に高めるよう喚起したい。それによって人格的にも調和がとれ、見識と責任感をそなえた人材輩出の学府となると思われる。

五、総合大学としての意義は、多様な人間の行為を全体として捉えることにあるが、部局

の個性とその実績を踏まえて、広く社会に開かれた大学にしていきたい。そのためには、部局の教職員が、社会から何が学べるか、社会に何ができるか等々の問題をたえず意識して諸活動を行い、固有の知の価値が輝きを増すよう喚起したい。

六、図書館には国内・国外に誇れる人文学系・社会科学系の貴重なコレクションが数多く所蔵されている。情報化の時代であるが、これら稀覯本の整理を進める体制を整え、それを促進し、基礎学の進歩に資するとともに、学界また広く国際社会に貢献したい。

図書館の存在は重要である。広島大学内外の意欲ある学生たちのために司書資格の取得できる制度を設け、それを通して広く社会の文化力向上に寄与できる教育機能をもそなえた存在にしたい。

七、広島大学の総合力は、部局間、大学間の協定等によって世界へ発信される状態にあるが、国際的な交流の展開にはこうしたことを踏まえて、きちんとした国際戦略を構築して行動したい。

八、広島大学として特色を出しながら地域社会の人々のよりよい生活に資する様々の情報発信や、学術・文化の振興の拠点として一層活動できるよう総合的な取り組みにつとめたい。

九、このような活動に取り組み、推進するのは教職員であり、学生である。そのために誰もが学びやすい学習環境や勤務しやすい労働環境の整備にも十分つとめたい。具体的には、託児施設を設置して学生（特に大学院生）の研究や教職員の仕事を支援したい。

十、以上のような事柄を相互に関係づけながら、教育、研究、そして社会連携、それぞれの面においてより発展していくよう教職員の意識の改革、その浸透をはかるとともに、教職員の改革に立ち向かう共感を得つつその使命感を高め、行動の哲学ともいうべきものを創造したい。

組織力は構成員の哲学、それに基づいて工夫された行動によって深まり、かつ高まる。法人広島大学は、部署ごと、階層ごと等々、その制度を適正に運営していく創造力、文化力をそなえた人材をできるだけ多く自覚的に輩出していかなくてはならない。他大学等との職員交流も一層進め、姿勢が内向きにならないようつとめたい。

この１００年間を振り返ってみても、人は政治体制に変革が起こっても、経済構造に変動が生じても、そして価値観が転換しても、それに向き合って苦難のなかを課題の達成に向けて生き続けてきた。

法人化して１年を経て現状を直視し、将来の発展を考えた場合、いま何を継承し、何を断ち切って何を創造するか、とりわけ教職員がその内面において法人構成員としての意識を成熟させ、希望を持って職務を遂行するためには極めて重大な時期であると思われる。

次期の学長には、有為の方々の協力を得て、現状の問題点の改善をはかりながら、法人としての広島大学の管理運営体制の整備・充実を進める役割が課せられている。

私としては、そうした明確な意識をもって十分な時間を内政にかけて進むこととしたい。